

令和 2 年 6 月 23 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16905

研究課題名(和文)近世公武婚の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive research on Marriage between samurai houses and court noble in the Edo Period

研究代表者

石田 俊 (Ishida, Shun)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：70711224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、江戸時代の公家と武家との婚姻に注目し、その実態を明らかにすることを目的とするものである。武家・公家両方の史料をもとに、外様大名・一門大名・譜代大名それぞれについて公家との婚姻がどのような意味をもったのか検討した。

本研究の結果、特に外様大名である萩藩毛利家、一門大名である松江藩松平家について、大きな成果が得られた。江戸時代においては、大名が重要視したのはあくまで将軍との関係であり、公武婚には、将軍とつながりを有した公家と婚姻することで将軍との関係を深める目的があった可能性が高いことを明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

上述のように、本研究では萩藩毛利家や松江藩松平家の事例から、公武婚には、将軍とつながりを有した公家と婚姻することで将軍との関係を深める目的があった可能性が高いことを明らかにできた。従来、公武婚については、朝廷権威や公家文化への憧憬と単線的に結びつけられる傾向があった。本研究の成果により、江戸時代における将軍と朝廷、および大名三者の関係について新たな知見を加えることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the reality of the marriage between court noble and samurai houses in the Edo period. Based on the historical materials of both samurai and court noble, we examined what the meaning of the marriage with the court noble was for each of the Tozama Daimyo, Ichimon Daimyo, and Fudai Daimyo.

As a result of this research, great results have been obtained especially for the Hagi domain who is a Tozama Daimyo and the Matsudaira family of the Matsue clan who is a Ichimon Daimyo. In the Edo period, the importance of the daimyo was to the relationship with the shogun, and publicly-married marriage may have had the purpose of deepening the relationship with the shogun by marrying court noble that had a connection with the shogun.

研究分野：日本近世史

キーワード：朝幕関係

1. 研究開始当初の背景

日本近世において、政治は武家(幕府や藩)が行い、天皇・朝廷はそれを権威化・序列化する役割を果たした(高埜利彦「江戸幕府の朝廷支配」『日本史研究』319、1989年)。藩主は参勤交代により江戸と国元を往復し、妻子の江戸居住が義務づけられる一方、公家は身分集団として京都に集住した。このような幕藩体制において公武婚を行うメリットとして、武家にとっては「貴種」の血の導入や家格上昇、公家にとっては婚家からの経済的援助が挙げられている(平井誠二「江戸時代の婚姻」『姓氏と家紋』61、1991年、および松澤克行「公武の交流と上昇願望」『江戸の人と身分3 権威と上昇願望』吉川弘文館、2010年など)。これは主に朝幕関係史の研究成果であるが、公武婚の内実を深く検討する意義は、朝幕関係史にとどまらず大きい。例えば家格の問題は幕藩関係や藩相互の関係に密接に影響する。また公武の身分が交わる機会であり、身分論の発展にも寄与しよう。嫁ぐ女性に焦点を当てれば、女性史・ジェンダー史と結合することも可能である。

特に武家社会の奥向きについては近年研究が蓄積されており、跡継ぎの養育という役割のほか、大名正室が大名とともに「家」の代表者として将軍・他大名家や家臣と儀礼的関係を結び、一定の政治的役割を担ったことが明らかになっている(長野ひろ子『日本近世ジェンダー論』吉川弘文館、2003年)。公武婚においては、婚姻によって公家出身女性とその女中とともに武家の奥向きに入り、また逆に、武家出身女性とその女中とともに公家の奥向きに入るようになる。文化的背景の異なる公武の奥向きが交わることは、奥向きのあり方や役割にどのような影響を与えるのであろうか。研究代表者は平成26・27年度に若手研究(B)「近世公武社会の奥向きの形成・展開に関する研究」で研究費をいただき、武家のみならず公家における奥向きのあり方を含めて分析し、武家では萩藩毛利家・松江藩松平家、公家では勧修寺家・石井家などについて検討を重ねてきた。その結果、公武の奥向きの交流や相互に与えた影響を考える上でも、公武婚の検討が欠かせないという着想にいたった。

その上で先行研究を見直すと、これまでの研究には以下のような問題点を指摘しうる。

(1)史料の多い外様大藩に研究成果が集中しており、その成果が公武婚の特徴として一般化されていること。実際には一門や譜代、さらには小藩や旗本に至るまで、公家と婚姻を結ぶ例は少なくない。彼らにとっての公武婚は外様大藩とは違った意味を持つ可能性がある。公家としても、経済的援助をさほど期待できない小藩・旗本となぜ縁組をしたのか、問われなければならない。

(2)公家側・武家側どちらかの史料に依拠しており、実証面でいまだ問題をかかえていること。

(3)基本的に個別事例の蓄積であり、公武婚の意味やその変遷について大きな枠組みを描けずにいること。確かに婚姻の様相は時々の事情や家風により大きく異なることが予想され、総合的に論じるのは容易なことではない。しかし上記の二点を踏まえ、幕藩体制における公武婚について、改めて全体像を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

上述の課題をうけ、本研究課題では、奥向き研究の視点を含みこみ公武婚の研究を進展させることを目的とし、(1)従来言及されてきた外様大藩のみならず、小藩や一門、譜代をも含み込んだ分析を(2)武家・公家双方の史料を用いて行う。具体的には、縁組決定まで

の交渉過程、表向き・奥向き双方における婚姻後の公武交流、後の時代への影響などを明らかにし、それによって(3)公武婚の有様やその変遷を総合的に論じることを最終目標とする。上述の課題をうけ、本研究課題では、奥向き研究の視点を含みこみ公武婚の研究を進展させることを目的とし、従来言及されてきた外様大藩のみならず、小藩や一門、譜代をも含み込んだ分析を武家・公家双方の史料を用いて行う。具体的には、縁組決定までの交渉過程、表向き・奥向き双方における婚姻後の公武交流、後の時代への影響などを明らかにし、それによって公武婚の有様やその変遷を総合的に論じることを最終目標とする。

3. 研究の方法

具体的な素材としては、まず外様大名について、萩藩毛利家およびその支藩を検討対象とする。毛利家は公家の勤修寺家と関係が深く、朝廷への献上物は勤修寺家を通じて行っていた。しかし婚姻については勤修寺家より家格の高い鷹司家や親王家と結んでいる。この経緯を検討することで、外様大藩の大名が求めた「貴種」とはどのようなものであったのか、明らかにすることができるであろう。また、婚姻時期も分散しているため、時期ごとの変化もおいやすい。さらに本研究では徳山藩・長府藩・清末藩といった萩藩の支藩もあわせてとりあげる。例えば徳山藩は葉室頼孝 毛利就隆女(17世紀半ば) 八条隆輔 毛利広豊女(18世紀半ば) 姉小路公聰 毛利広豊女(18世紀後半)などの婚姻を結んでいる。葉室・八条・姉小路はいずれも堂上公家だが、本家が縁組をした摂家や親王家より家格は低い。これらを比較検討し、外様大藩と小藩の公武婚をあわせて解明していく。萩藩・徳山藩の史料はいずれも山口県文書館に所蔵されており、山口大学に所属する研究代表者にとって効率的な史料収集が可能である。また、公家側の史料としては京都大学総合博物館所蔵勤修寺家文書・宮内庁書陵部所蔵葉室家文書などを用い、多角的に検討していく。

一門大名としては、松江藩松平家をとあげる。特に中心事例と想定しているのが、18世紀前半の松平宣維 伏見宮邦永親王女(天岳院)の婚姻である。当時の将軍世嗣徳川家重が邦永親王女を娶ったことから、天岳院は将軍世嗣の義姉となった。将軍家の親族であり、かつ宮家出身という彼女の立場や役割を分析することで、藩政と奥向きとの関わり、および将軍家・大名・親王家それぞれの奥向きの交流について明らかにすることができよう。研究代表者は『松江市史』に近世史部会員として加わっており、史料へのアクセスが容易である点も本事例を選んだ理由である。公家側の史料としては、東京大学史料編纂所蔵伏見宮日記やそのほかの公家日記をあわせて用いる。

譜代大名については史料が少なく、公家文書が分析の中心となる。核となる事例は今後史料収集を行って決定していくが、譜代大名出身女性が嫁いだことによる奥向きの変化や、公家が譜代大名との婚姻で得るメリットなどを日記やそのほかの史料から明らかにしたい。

4. 研究成果

(1) 外様大名と公家との縁組

外様大名と公家との縁組については

・「萩藩における公武婚」(2017年度読史会大会学会報告)

にて報告した。本報告は、萩藩毛利家と鷹司家との縁組を詳細に検討したものである。まず毛利秀就女高政院と鷹司房輔の縁組では、鷹司家は正室の知行目当てと思われないう、萩

藩からの財政援助には消極的な姿勢をみせていた。元禄十六年に成立した毛利吉広と鷹司輔信女養心院の縁組において、萩藩は重縁である事に加え、養心院姉が嫁いでいた水戸家との関係、および叔母にあたる綱吉御台所浄光院との関係に期待して縁組を承諾しており、朝廷を利用して自家の権威をあげようとした形跡はみられない。そして、養心院付女中やその賄金は萩藩が選定あるいは負担しており、養心院には里付奥家老もおらず、萩藩に丸抱えされた状態であったと指摘した。次に宝暦十一年に成立した鷹司輔平と毛利重就女妙池院との縁組を検討した。萩藩は徳川家治室心観院（鷹司輔平姉）との関係から縁組を断れず、多額の普請料と妙池院の賄金が萩藩の負担となった。ただし、その結果萩藩から里付奥家老を含む多数の藩士が妙池院に付き、女中も萩藩が選定するなど、公家社会にも適合させる工夫をしつつも萩藩の家風を持ち込む形となった事を論証した。萩藩は幕府との関係を常に意識して縁組を締結していた。一口に公武婚といっても公家の娘か武家の娘かで立場は大きく異なり、家風や時期的差異にも注意して事例を積み重ねる必要がある。朝廷権威や公家文化への憧憬と単線的に結びつけるのは慎重であるべきであると主張した。

また、公武婚のみならず、萩藩の奥向全体の分析として

- ・「萩藩毛利家の「裏」とその構造」（要旨）（『山口県地方史研究』123、2020年）

を準備した。これは2020年6月14日に行われる予定であった第131回山口県地方史研究大会にて報告する予定であったが、コロナウィルス感染防止対策のため中止となってしまったもので、要旨のみ記載されている。引き続き、学会報告または論文として発表の機会を探している段階である。

（2）一門大名と公家との縁組

一門大名と公家との縁組については

- ・『松江市史 通史編3近世』
- ・「松平宣維室天岳院の立場と役割」（『松江市史研究』9、2018年）

の二本の論考を通じて、松江藩松平家の奥向の構造や、上述の天岳院の立場や役割について明らかにした。特に本研究課題に即していえば、松江藩が宣維と天岳院との婚姻によって天皇・朝廷との関係を強化し、貴種化・権威化を目指したわけではなく、伏見宮家との縁組を通じて徳川將軍家とつながることに意味があったことを解明した点は重要である。なお、天岳院の没後も松江藩と伏見宮家との交流は続いたが、寛政三年（一七九一）に伏見宮家から縁談が持ち込まれた際、当時の藩主治郷は断る姿勢をみせており、公家社会と一定の距離を保ち続けている。そもそも徳川將軍家や御三家・御三卿は、近世を通じて摂家・親王家と縁組を繰り返している。この点から考えれば、天皇・朝廷に直接結びつくというより、將軍家や他大名家と関係を深めるための公武婚というのが、特に国持大名クラスの公武婚の一類型として想定しうると考えられる。この点は、前述した萩藩における公武婚とも重なる論点といえよう。

なお、

- ・「不昧の祖母、天岳院の一生」（『なごみ』462、2018年）
- ・『不昧の手紙 —「大圓公手翰」を読む』（松江市、2020年）
- ・「松江藩の縁組と相続戦略」（松江市史講座、2019年）

は、上述の成果をより一般向けに還元した成果と位置づけられる。

（3）譜代大名と公家との縁組

譜代大名と公家との縁組については、

・「日記が語る近世史 ―近世公家日記の記述から―」（倉本一宏編『日本人にとって日記とは何か』臨川書店、2016年）

では、勸修寺経慶が江戸に登った際、縁戚関係のあった備後福山藩の江戸詰家臣を使って日々の用をたしていたことを明らかにした。とはいえ、時間的限界から十分な検討は行えておらず、今後の課題として残した。

（４）公武婚の全体像

こちらについても、かならずしも十分な検討が行えたわけではない。しかし

・「身分 ジェンダー（2018年歴史学界 回顧と展望 日本近世）」（『史学雑誌』128-5、2019年）

では、本研究課題の知見を生かして先行研究整理を行った。

（５）そのほかの成果

このほか、公武婚という研究課題とはややずれるが

・「桂昌院と寺院 ―長命寺穀屋尼僧との関わりをめぐって―」（竹内誠ほか編『論集 大奥人物研究』東京堂出版、2019年）

は、将軍の母である桂昌院の信仰について検討し、その影響力については再検討が必要であることを提起した。

さらに

・江戸時代の奥向きと女性（山口市地域未来創生センター、2016年）

・江戸時代の天皇と公家社会（ひかり高年者生きがいセミナー、2018年）

は本研究課題の成果の一部を一般に還元した講演会である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 石田俊	4. 巻 123
2. 論文標題 秋藩毛利家の「裏」とその構造（要旨）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山口県地方史研究	6. 最初と最後の頁 138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田俊	4. 巻 128-5
2. 論文標題 身分・ジェンダー（2018年歴史学界 回顧と展望 日本近世）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 139-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田俊	4. 巻 462
2. 論文標題 不昧の祖母、天岳院の一生	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 なごみ	6. 最初と最後の頁 108-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田俊	4. 巻 9
2. 論文標題 松平宣維室天岳院の立場と役割	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 松江市史研究	6. 最初と最後の頁 7-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石田俊
2. 発表標題 萩藩における公武婚
3. 学会等名 読史会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石田俊
2. 発表標題 松江藩の縁組と相続戦略
3. 学会等名 松江市史講座
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 飯田 奈津子, 内田 文恵, 小林 准士, 三宅 正浩, 伊藤 昭弘, 石田 俊, 藤間 寛, 和田 朗雲, 西島 太郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松江市	5. 総ページ数 103
3. 書名 不昧の手紙 「大圓公手翰」を読む	

1. 著者名 小宮山敏和, 崎山健文, 吉川美穂, 深井雅海, 高田綾子, 浅倉有子, 久保貴子, 神崎直美, 渋谷葉子, 竹内誠, 松尾美恵子, 大口勇次郎, 石田俊, 畑尚子, 藤田英昭	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京堂出版	5. 総ページ数 488
3. 書名 論集大興人物研究	

1. 著者名 小林准士, 佐々木倫朗, 西島太郎, 三宅正浩, 石田俊, 伊藤昭弘, 岸本覚, 渡辺浩一, 渡辺理絵, 大矢幸雄, 東谷智	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松江市	5. 総ページ数 779
3. 書名 松江市史 通史編 近世	

1. 著者名 倉本一宏, 松園斉, 石田俊, 佐野真由子, 奈良岡聡智, 久富木原玲, 阿尾あすか, カレルフィアラ, 井上章一, 富田隆	4. 発行年 2016年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 274
3. 書名 日本人にとって日記とは何か	

〔産業財産権〕

〔その他〕

とある公家の娘と大名の縁組から http://www.hmt.yamaguchi-u.ac.jp/?p=13655
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考